

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 9

不妊と家族の相関関係

荒木 晃子

聴き手自身に、時間が必要だった。日を開けて、B子さんとのアポイントを取る。事前に、先日の女性心理士とのインタビュー内容をまとめ、メールで報告を済ませることにした。彼女が連絡を待ち望んでいることを知っていたからだ。送付メールに、次回はこちらから伺いたいことがある旨を書き添えると、彼女からは、「では、いつもよりゆっくり時間をとります」と返事があった。いよいよ、その時が来たようだ。

「生殖革命の物語 エピソード③」 ～そのとき、家族は～

「いつ話そうかと悩んでいたんです」
あらたまった口調で彼女は静かに返答した。

「ほんとは、話すべきかどうか迷っていたのかもしれないし、もしかすると、全部は話せないかもしれないのです」

『わかりました。でも、あなたなら大丈夫。私を信じてください』と、こころのなかでつぶやく。ことばは不要だ。

「今日は、これまで伺った話の中で、あ

まり触れることのなかったご家族の話を聴かせていただけませんか？」できるだけシンプルに、そうたずねる以前から、目線は彼女を捉えていた。視線には、話し手に対する信頼と、聴き手がそれを聴くことへの責任と覚悟が込められている。その際、二人が共有する時空間には、おそらく時間の逆行が始まっていたのかもしれない。B子さんは、私からの質問に、いつになく重い口調で語り始めた。

「はてはて、どこから話せばいいのやら・・・」天井を見上げ、まるで観念したかのように「ハァ～」と大きく息を吐く。わたしは「あなたの思いつくままに」と一言だけ返した。覚悟してね、と言わんばかりにB子さんは苦笑いし、背筋を伸ばしながら椅子に深く座りなおす。

キーパーソンとパワー

「先に、別れたパートナーの家族の話からね」彼女が最初に語る家族は、現在は家族ではない「モト家族の話」のようだ。

「いまとなっては、アカノ他人だから、あまり詳しくはいえないけれど。10数年

間、まがりなりにも家族だったから、その頃の家族の話ですればいいのよね？」

どうやら、話に登場するモト家族たちの、現在のプライバシーを守ってくださいね、と釘をさしたいらしい。私にはそう聞こえた。

「義理の両親は実家の両親とほぼ同年齢だったし、そういう意味では、実親とのギャップは感じなかったかもしれない。ただ、私はひとりっこ。義家族には、私たちが結婚した当時、すでに他家へ嫁いだ義姉には子どもがいて、義両親と一緒に独身の妹二人が住んでいたの。家業というか、義父は中堅会社の社長職で、モト夫はその専務。唯一の跡取り息子だったってわけ」

一気に早い口調で話す。ここまで聴いただけでも、不妊が問題になりそうな予感がする。「唯一の跡取り息子」という表現に、日本文化に由来する家長制度や後継者問題など、次世代につなぐ責任とその圧力を感じるの私だけではないだろう。

「カレは・・・」眉間にしわを寄せ、一瞬言葉がつまる。

「いちいち面倒だから、モト夫のことをカレと呼ぶわね！」宣言するかのように前置きした後、「要は、私たちの結婚生活は、義父が経営する会社の一室に住み、そこでカレが働くことで成り立っていた。私は毎日事務所に出勤し、経理を担当してた。ま、経営管理というか、お金の流れを管理してたわけ。義父は苦勞して一代で起業した人で、仕事が命のワーカホリック。義母は良妻賢母、は言い過ぎかもしれないけど、その家の女性たちは皆、

夫を支えて生きていくタイプ、だったわね。女性は結婚し子を産んで家を守り、夫に尽くすのが女の幸せ。男性は、家庭を顧みず懸命に仕事だけに打ち込んでこそ、男の生き方、みたいなの。まあ、私たちの親世代によくあるタイプ。姉妹全員、もちろんカレも含めてみな高学歴でありながら、女性は家事と子育て、男性は仕事一筋、って、いまどき珍しいくらいの貴重な価値観だと思わない？」

貴重と呼ぶのがふさわしいかどうかは別として、現代家族の男性・女性の性役割として考えると、かなり古典的な家族観があったともいえるかもしれない。特に、企業や人間が集中する都心部ではいまどき珍しい、という表現がふさわしいだろう。

さらに、二人の結婚生活が「義父の会社に後継者でもあるモト夫が働くことで成り立っていた」ということは、二人の生活資金は義父の手中にあったとも言い換えられる。大学を卒業した後社会経験を積むことなく家業を継いだ息子夫婦は、原家族と切っても切れない運命共同体の関係にあったのだ。

家族システム論でいうところの、家族キーワードの一つにパワーがある。「お金」という権力は、家族のパワーにかわる恐れがある。つまり、お金というあからさまな力をもつ義父は家族全体を支配できるキーパーソンであったともいえる。そこにB子さんが家族の一員として暮らしていたのだと思うと、「時代が違う」のひとつでかたづけたいいけないように思う。それにしても、モト家族を語る際、B子さんがその都度私に同意を求めるの

が気になる。

「でもね、義理の両親もその姉妹たちも、本当にまじめで、気持ちの優しい人たちだったのよ。お正月や何か行事があると、みんなで集まっては、賑やかにおしゃべりしながら家庭の味を楽しんでいた。妹たちも可愛くて！ひとりっこの私にとって、初めての姉妹だったの。特に一番下の妹はまだ学生だったから、よく一緒に旅行に出かけたりしたわね〜」

目を細め、頬をほころばせながら語るその顔には、懐かしいふるさとの思い出を語る時のように穏やかだった。

「そうね・・・いま思えば、決して悪い人たちではなかったわ。むしろ、家族思いの仲の良い陽気なファミリーって感じだったかしら。結婚した当初はね」ちら、と横目で私をみる。

「みんなよく集まるもんだから、話題が豊富な家族だった。義姉も義兄と一緒に、子どもを連れて頻りに里帰りしてたしね。姪はまだ小さくて天使のようだった。小さい子がいると、とにかくにぎやかで楽しいでしょ？私もカレも子どもが大好きで、その子を抱きながら“早く子どもができないかな〜”って、笑いながらいつも言ってたの。そんな頃もあったのよ。でもね、結婚して2年ほどたつと、義母や義姉から“B子さん、どこかおかしいんじゃないの？一度病院に行ってきたら？”とか、“いい病院があるらしいから今度教えてあげる”とか、いろいろアドバイスが入るようになってね。私も子どもは欲しかったから、あまり心配かけてもいけないと思い、言われるままにあちこちの病院で検査したり、受診したりし

たの。でも、いくら検査してもどこも悪いところはないといわれるし、夫婦仲も良かったし。その頃は、子どもがいないことは、まだ、二人にとって、目の前の重要な問題ではなかったのよね」時折遠くを見る目をしながら、話はただ淡々と続く。

「前に話したことがあると思うんだけど、ある晩彼が古くからの友人とお酒を飲んで帰ってきた晩のこと、おぼえてる？」

4章でB子さんが語ったモト夫が絡んできた夜の話だ。『いくらお金があっても、子どももつukれないとは情けない。男なら、悔しかったら、子どもの一人ぐらいつくってみろ！』とお酒の席で友人に言われ、悔し涙を流しながら泥酔したエピソードのことだ。「その日から、二人の関係が少しずつ変わっていった」確かに彼女はそう語っていた。記憶にあるそのエピソードを伝えると、彼女は納得したようにうなずいた。

心配という名の干渉

「いまから私が話すことは、私にとってはとても辛くて、言いにくいこと。そして、あなたにとっては、聴きづらくて、聴くことが嫌になるかもしれない話し。それだけじゃないの。もしかすると、私のことが嫌いになるかもしれないほどの内容だと思って欲しい」わかりました、とだけ答える。

しかし、B子さんの緊張した表情は変わらない。いったい、私がB子さんを嫌いになる話とはなんだろう。からだに力が

入る。

「あの日から、家族みんなが変わった気がするの。もちろん私自身もね。あの後・・・」二人の関係が変わっていった、たしか、B子さんはそういったはずだ。でも、つい今しがた聞こえてきたのは、「家族みんなが変わった」ということば。変わったのは二人の関係だけではないのか？思わず首を傾げた私に向かって、ふっ、と笑みを浮かべ、そして消える。それには、どうリアクションしていいか分からない。B子さんは、構わず話を続けた。「少しずつ・・・一人ひとは、少しずつなんだけどね、変わったのよ。その時は、何が何だかよくわからなかったんだけど、今なら分かるの。たとえば、義母は、親戚のだれだれちゃんが妊娠したらしい、とか、B子さんは痩せすぎてから妊娠しないんだ、とか、犬ばかり可愛がってるから子どもができないんだ、とかいろいろ言うようになってきた。義姉は義母とよく似た性格だったから、同じような感じだったかな。子授け寺や病院の情報なんかを集めては、何かのついでのように、私に連絡をいれてくれてたから」

一瞬自分の耳を疑った。いま私の耳に入ってくる言葉は、20年以上も前の話のはず、それは間違いない。しかし、またもや、先日、私が、現在治療中の女性から聴いた話とほとんど同じ内容なのだ。地方在住のその女性は、ひとつ屋根の下で暮らす大家族の中で、義両親や義叔母から同様のことを毎日のように聴かされ、「疲れ果て、もう精神的に限界だ」と涙をこぼしていた。同居自体は嫌ではない、とも言っていたが、これでは、いくら不

妊がテーマとなった会話を家族がしても、家族で不妊問題を話し合い、当事者夫婦に協力するというより、ただ単に、干渉しているにすぎないではないか。行き場のない怒りがこみ上げてくる。「ね？嫌な話でしょ？」嫌な話というより、むしろ、見えない圧力に押しつぶされていくような、知らないうちに空気が薄くなっていくような、息苦しさを覚える。

「自分で話していても、なんというか、モト家族の悪口を言ってるみたいで気分がよくないの。みんな悪気がないのは分かっていたし、よかれと思って言ってくれたんだと思うのよね・・・わかってはいたけど、うれしくは思えなかったの、その時は。あ、ちょっと待って・・・」口を一文字に結び、目を開けたままじっと考え込む。

「うん、いくら考えても、今でもうれしくは感じないわ。だって、慰めでもなく、励ましでもない、なんていうか、何もかもが、早く妊娠しなさい、というメッセージにしか聞こえないんだもの。それとも、私の受け取り方が歪んでいるのかしら？」

本当に、そうなのだろうか。B子さんの受け取り方が歪んでいたのだろうか。いま、私が聞いても、愛情ゆえの言葉には聞こえない。また、これまでの面接でも、数えきれないほどの当事者女性が同様の感覚を語っている。これは、つまり、当事者心理で聴くと、“そうとしか聞こえないことば”といえるのだろう。それに、たとえ、いかなることばがけでも、共に暮らす家族がみな時折そのことばをかけるならば、B子さんにとっての“時折”で

はなくなるではないか。

お家騒動とおせっかい

このように、家族の中でさえ、不妊問題についての的外れな干渉は、たとえそれが些細なことであっても、当事者夫婦にとって、あまり歓迎されるものではない場合がある。特に、自然妊娠の末出産したため、“子どもができないことを辛いと感じた経験”のない親世代（当事者カップルの実親は不妊体験者でないと仮定して）にとっては、これまで自分自身が経験したことのない問題が勃発したことになる。しかも、自分の血を受け継いだ実子に起きた血縁の継承問題となると、まさに他人事ではないはずだ。そのうえ、実娘もしくは実息子夫婦が“悩んでいる”のを知ること、さらに心配が膨らみ、何とか力になりたいと考えるのも親心からであろう。当然、そのように身内の不妊問題に、当事者夫婦を心配し、強い関心や問題意識を向ける身内が現れても不思議はない。家督の継承や世襲制度を抱えた血族関係の縁が深ければ深いほど、その傾向は強く表れる。また、この傾向は、都市部より、地方に暮らす家族の特色でもある。一例をあげると、ある地域に行くと、〇〇さんという名字の方が大勢住んでいる、といった地域のことをいう。現在も、本家・分家などの家督の継承が代々受け継がれる風習の残る地域には、その家に嫁いだ嫁と呼ばれる女性たちや、入り婿と呼ばれる男性たちに、血の継承を切望されることが多い。そこに

起きた不妊問題は、当事者夫婦の問題としてではなく、家族の問題としてクローズアップされ、お家騒動に発展するケースも実在する。このような家族形態をもつ場合、家族からの干渉が、不妊に悩む当事者夫婦の問題に、火に油を注ぐような事態を招くことには気をつけなければならない。

さらに、当事者にとって、不妊問題は、家の中だけの問題とは限らない。最近、働く女性も増加し、職場の人間関係にも「不妊にまつわる関係性の問題」が生じるケースが多い。女性が結婚すると、周囲の人たちから“子どもはまだ？”と聴かれることが慣習的にある。日常に、まるで挨拶がわりに常用されるので、子どもがいないことを問題にしていない人にとっては、わだかまりも、それを聴くことへの違和感さえもたないだろう。しかし、不妊を問題とし、さらに、不妊に悩み自分なりに努力している者にとっては、その挨拶は苦痛以外のなにものでもないのだ。たとえば、受験に失敗したばかりの学生に、“まだ合格しないの？”と聴く人はいないだろうし、ましてや、不妊は受験ほど、人生に於いての比重は軽くはない。あえて例えるならば、命に別条はないレベルの腫瘍が見つかった患者が、治療のために摘出手術を選択するのではなく、リスクも覚悟の上で放射線治療が始まったとたん、“もう病気は治った？”と尋ねられるようなもの。もしくは、原因が特定できない体調不良を克服すべく、食生活や生活習慣に配慮しながら、その体質改善を目指して日々努力する人に、“まだ治らないの？”と無神経に声を

かけるようなもの、といった方が近いかもしれない。いずれにしろ、健康な生活を目指し、治療もしくは体質改善の成功を願い、不安と期待のはざまを漂う患者に対して、そのような声をかける際に必要な配慮不足や、相手を傷つける場合があることに、注意を払う必要がある。

だれが産んでも

「義母は同じ女性だから、まだ、ましたったかもしれない。同じ料理好きということもあって距離も近かったし、私としては、嫁姑の割に普段から仲が良かったと思ってる。やっぱり、同性だしね。でも、義父からのひとは、かなりきつかったな。ある時、カレと三人で話す機会があってね、いつものように、子どもはまだか、って話になったのよ。カレは、私に気をつかい。あ、それまでも、ずっと真剣に不妊治療専門の病院に通院していたし、二人でできる努力は全部していたの。それに、“ある事件”が起きた後だったので、大変な状況の中にあっただけだったし。その頃が私にとって、一番つらい時期だったかもしれない。毎日泣き暮らす、ってああいうことをいうのね、きっと。唯一、そんな私の状況を知っていたカレは、周囲に対してかなり敏感になっていたんだと思う。カレ自身もその件に関して、だれかになにか言われるのを嫌がってたから」

“ある事件”？とは、初めて聴く話だ。びくっと、ことばに反応した自分が分かる。しかし、B子さんはそんな私に気付か

ない風に、ややスピードをあげ話し続ける。

「その時も、義父から切り出した子どもの話に対して、カレが“おやじ、もうその話はやめてくれ！”って強い口調で言い返したの。すると義父は“お前たちはそれでいいかもしれないが、私はそうはいかない。内孫がいないと、会社はどうなるんだ！誰が産んだ子でもいいから、早く連れてこい！お前の子なら、だれが産んでも孫は孫だ！”って、怒鳴るように言った。男性同士の喧嘩なんて、それまでに経験したこともなかったし、その場にいた私は、もう、怖くてしかたがなかった！からだが震えて、涙があふれて。義父が言った言葉の意味が一瞬分からなかったくらい、おびえてたと思う。でも、そのあと、ゆっくり、“ああ、私じゃなくていいんだ、誰でもいいんだ、義父はカレの子どもが必要なんであって、その子を産めない私はいらないんだ”って、いろんな思いが頭の中でぐるぐる回りはじめて、その場を飛び出してしまったの」私は、何も反応することができなかった。

「いま思えば、あの時、あそこにいなきゃよかったと後悔してる。まあ、そんな展開になるとは、誰も思いもよらなかったんだけどね」固まった状態の私に、軽くウィンクしてみせた。私は瞬きして返す。

「似た者同士の親子だったのよね～義父とカレは。二人とも気が強くて、仕事のちの職人気質っていうか。自分の人生は自分で切り開く、みたいな頼もしいタイプの人だったわね。不妊の問題さえな

ければ、いい関係でいられたかもしれないわね～それはないけど！」声のトーンをあげ、私を気遣うように上目づかいで笑顔を向けた。「少し休みませんか？」本当は、そう申し出た自分自身に休憩が必要だった。

エスカレート

少し長めの休憩を入れ、部屋に戻るとすでにB子さんが待っていた。「お待たせしました」、そう言い終わらないうちに話が始まる。

「さっきの、義父の話なんだけど。義父は、決して私に向かって怒ったわけじゃないことはわかってたのよ。その場に私がいなければ、きっと違う展開になっていたと思う。私もカレも、“自分たち夫婦の子どもがほしい”のであって、他の女性に子どもを産ませて自分たちの子どもにしよう、という発想はなかったの。その時はね」えっ？！っと、思わず声に出してしまう。彼女は、私にかまわず話を続ける。

「でも、義父は違った。彼には孫が必要だったのね。つまり、私たちが不妊に悩んでいることは、義父にとっての問題ではなくて、“孫ができないこと”自体が問題だったのよね。そうなの、まったく別の問題だったのよ」

彼女はまるで自分に言い聞かせるようにきっぱりと言い切ったし、まったく、その通りだと思った。夫婦にとっての不妊は、“自分たちの子どもができない”という、夫婦の問題であって、決して家督や

血族の後継者問題を優先してはならないのだ。義父にとっての問題は、“自分の血を継いだ孫ができない”、言い換えれば、世襲制度が存続できないことにある。ゆえに、“だれが産んでも（自分の）孫は孫”という発想になる。しかし、それは、夫婦の問題とは異なる問題である。そのことを重要視する義父の問題だったのだ。

このエピソードは、不妊問題を家族で共有する際に頻繁に起きる出来事である。自分たちの子どもができない、と悩むのが不妊当事者カップルであり、孫ができないことは、親世代の問題である。したがって、親世代の問題解決を、次世代の不妊当事者カップルに求めると、B子さんが経験したような「家族関係の問題」が生じることには注意が必要となる。ここに、家族システム論でいうところの世代間境界の明確化が、家族の不妊問題にとって、いかに重要なのが現れている。家族療法の実践に於いては、上の世代は下の世代に関わらないことが大切な場合もある。

境界破り

i. 世代間

「家族の境界」というキー概念上、もともと、世代間境界が不明瞭な関係や、一方の世代からの境界破りが頻繁に起きやすい関係をパターンとして持つ家族関係があると、不妊問題はより複雑化する危険性がある。B子さんのモト家族の場合、義父が実息子に世襲制度の維持を求めることで、下の世代の不妊問題に干渉する

事態が起きている。義父が実息子に対して、“お前の子なら、だれが産んでもいい”という発想は、まさにその象徴である。また、そのことで、B子さんが、「夫の子を産めない自分はいらない存在」と自分の存在自体を完全否定されたような感覚に陥ったとすれば、それは当然であろう。かつて、ある政治家が“女性は産む機械”と公言し、人権侵害や女性蔑視の問題発言を指摘され、一時的に公職を追われたことがあるが、それと同様の発言を、直接個人に向けられたのだから、たまったものではなかったであろう。

「血の継承へのこだわり＝信念（ビリーフ）」と言い換えることができるこの発想は、ときに、親世代以上の世代がもつ場合が多い。それは、その家に受け継がれた家族観であったり、「しきたり」ということばで正当化されることもある。このような、刷り込みにも似た、強化されたビリーフを容易に変えることは難しい。ゆえに、いったん不妊問題が家族の問題にかわった場合には、当事者夫婦は、自分たちに起きた問題に上積みされる形で、親世代の問題である、次世代への継承問題を引き継ぐか否かの決断を迫られる状況に遭遇することを覚えておきたい。不妊は、世代間境界をこともなげに破壊する脅威となり得ることもあるのだ。また、このようなビリーフが、当事者夫婦のどちらか一方にある場合は、さらに厄介である。夫婦が子どもをもつことそのものに、血の継承の動機付けが生じると、不妊問題の定義そのものが拡大し、はじめから夫婦の問題として解決する方向性から外れることも考えられる。その場合、

血の継承を優先するばかりに、家族の核となる夫婦関係の存続が困難となり、相手をかえる（＝離婚）、もしくは第三者の介入を得て血の継承を維持するという、より家族関係が複雑化する可能性が生じることに注意しなければならない。はじめに、夫婦が子どもをもつことありきで、その結果が世代間継承につながるのである。

ii. 家族サブシステム

続いて、「家族内外の境界」という視点で本ケースを検証する。

まず、「血の継承＝夫婦の実子を得る」という視点で不妊問題の解決を求める当事者夫婦が、最初に訪れる割合が高いのは、生殖医療施設であろう。近年の傾向として、高度生殖医療技術が不妊問題の解決手段にかわり、「治療すれば妊娠できるはず」と考え、まずは夫婦だけで解決しようと試みる傾向にあるからだ。その場合、医学的に不妊問題を捉えると、男性不妊の場合と、女性不妊の場合では問題の傾向と、その解決手段が異なる。一例をあげると、B子さんのモト夫が男性不妊であったならば、B子さん夫婦に起きた出来事はまた違った形で解決していたのかもしれない。義父は、“だれが産んでも”ということばを使えなかったであろうし、自分の息子が原因で不妊問題が起きていることへは、実親として違った形で介入したと考えられる。義父が、あくまでも、血の継承にこだわるのであれば、場合によっては、後継者問題が、姉妹に及ぶことも予想できる。

他に、「女性に限定された後継者」の問

題が生じるケースもある。たとえば、有名美容室や老舗旅館の女将などを継承する場合や、後継者に男子がいない場合だ。このような女性に限定された後継者の問題が、実娘の女性因子に不妊原因がある場合と、娘婿の男性因子に原因がある場合は、おのずとその問題に対する家族の対応も、その解決手段も変わる可能性が大きい。当然、医学的な対応も違ってくるだろう。たとえば、“実娘が子どもを産むこと”を優先するのであれば、男性不妊が原因の場合には相手（夫）をかえる（＝離婚）、国内でも戦後早期に始まった精子提供を試みる、などの手段がある。また、女性不妊が原因の際には、卵子提供から代理出産といった第三者の関わる高度生殖医療技術も国外にある。いずれにしても、血の継承へのこだわりが不妊治療の動機にある場合の、最終的な不妊問題解決手段には、夫婦の二者関係だけでは解決できない問題も、解決できるのだということを知っておくべきであろう。当初、夫婦だけで解決する為に訪れたはずの生殖医療施設には、夫婦どちらか一方の不妊原因に、第三者の介入を得て解決するほどの高度な医療技術をもつ世界水準の医療者たちが待っている。元来、医療者は患者の同意なく治療することはないが、患者が望めばそれができる。もし、第三者の介入によって子どもの出産に至った場合、夫婦という二者関係の問題にはとどまらない「複雑な家族関係の問題」に発展することを理解したうえで、不妊治療を進めなければならない。

以上のように、不妊問題を夫婦の問題とせず、血族の継承問題に置き換えるこ

とで派生する家族間の紛争は、その血族全体の問題として波及する恐れがある。ゆえに、家族にとって、不妊問題の対応手段を知ることは、決して不妊当事者だけに必要な知識ではないことが分かる。結果として、精子や卵子の提供、または代理出産等の第三者の介入により誕生した子どもたちは、その複雑な家族関係の中で育つことを余儀なくされることを忘れてはならない。周囲の大人たちの都合で、子どもが「ある条件ありきで、この世に誕生することを求められた」とするならば、その子の未来に制限や縛りがかかることが懸念される。子どもにとって、健康でなければならない、成績が良くなくてはならない、などの条件付きの養育者の愛情は、その子の成長と発達に有効に作用するとは言い難い。以上、不妊問題が血族の継承問題となった結果、当事者夫婦を中心に家族間で相応の準備なく子どもが誕生した場合、その血族の継承問題は、さらに複雑化し、次世代へと受け継がれていくことには留意しなければならない。

iii. 家族の内と外

つぎに、「後継者問題の視点」で不妊を捉えると、不妊問題の新たな側面が垣間見える。B子さんの場合、継承するものとしては、義父が起業した会社のことをいうのであるから、社会的な問題としての側面があることは明確である。つまり、このケースの場合、「会社の後継者として孫が必要」とする義父の主張は、あくまでも、血族による企業資産の承継をいう、と解釈できる。本来、企業とは社会の一

部であり、特に株式公開されたものほど、株価等でその社会的価値が問われることとなる。聞くところによると、義父が社主を務めるその企業は、株式公開はされたものの、その株主はすべて血族で占められていたという。これは、一般に、国内の中小企業に多くみられる傾向で、会社を個人の所有物としてみる危険性を秘めている。最近では、血族による企業支配が続いた結果、経営破たん追い込まれた大企業などの報道もあるようだ。

また、不妊問題に限らず、社会的資産を相続する際の相続権をめぐる、家族内紛争が起きる事例も多いとされる。そこに、家族の外に相続権をもつ子孫がある場合には、より問題が複雑化する可能性がある。一般に、家族内トラブルは感情的で、家族以外の支援者の介入が困難なケースもあり、思わぬ重大な事件に発展するケースも少なくない。このように、不妊に限らず、後継者問題や世襲制などの社会的解決が必要な問題と、家族内で解決すべき問題、さらには、先に当事者夫婦で解決すべき問題などの、「必要な境界」を意識した問題解決を心がけなければならない。

このように、これまでのB子さんの話を、「構造的家族システム論上の家族の問題」として分析すると、「境界・パワー・サブシステム」という、家族のキー概念に関わる重要な問題解決のヒントが浮かびあがった。

覚悟

「さっき、言おうかどうしようか迷ったことがあったんだけど・・・」

瞬間的に、思わず身構える。これまでに、確認したいことを我慢して聞き続けていたからだ。今日のB子さんの話には、数えきれないほどの“気になるメッセージ”が盛り込まれていた。

「今日は、これまで伺った話の中で、あまり触れることのなかったご家族の話を聴かせていただけませんか？」

冒頭、そう口火を切ったのは私だ。しかし、今日のB子さんは、これまでに私が知る彼女とは、何かが違って見えた。その語りの背後には、まるで、「自分が話す以上のことをたずねないでほしい」といった、無言の裏メッセージを感じてしまう。まるで、B子さんが私に対して防衛線を張っているようでもある。「彼女は恐れている」この言葉が脳裏に浮かぶ。彼女は、「なに」を恐れているのだろうか？

おそらく、私ではなかった。彼女は、「それを語ること」を恐れているのだ。一瞬のうちに、かけめぐる思いは、B子さんの「恐れ」に共感した自分に次の指令を出す。気づかぬうちに力の入った自身の体の力を抜き、緊張した面持ち（だったと思う）の頬を緩めた。からだの力を抜くことに注意が向くと、唇を真一文字に結んでしまっていたことに気付く。あわてて大きく息を吸い、その後ゆっくり、時間をかけて、すう〜っと長い息を吐く。この一連の動作を、次の言葉が聞こえる前に、瞬時に済ませた。

次号へ続く